

なぜ不利な人びとは「誰にも頼れない」のか

——孤立をもたらす構造的・心理的メカニズムの計量分析——

龍谷大学 三谷はるよ

1 目的

本報告の目的は、現代日本人が孤立するメカニズムを実証的に明らかにすることである。先行研究では、低収入や不健康といった不利 (disadvantages) を抱える人びとほど孤立する傾向が示されている。しかし、なぜ不利な人びとが誰にも頼れなくなるのか、その詳細な過程は明らかでない。先行研究のなかには、彼らが抱く「助けてもらったら恩返しすべき」という互酬性規範 (Harknett & Hartnett 2011) や公的サポートへのスティグマ (Slade et al. 2007)、私的ネットワークの低階層性 (Letkia & Mierin 2015) に言及するものがあるが、いずれも十分に検証されていない。そこで本報告では、上記の仮説要因を不利と孤立を結びつける媒介変数として設定し、この分析モデルが支持されるかを全国調査データによって検討する。

2 方法

データは、報告者が2016年に実施した「生活と意識に関する全国調査」(郵送質問紙調査)から得られたものである。調査対象者は全国に居住する20～79歳であり、有効回収数は2,023(有効回収率: 45.0%)であった。被説明変数は、「悩みや心理的な問題が生じたとき」「経済的な問題が生じたとき」等の場面に対する「頼りにできる人はいなかった」という回答をもとにした孤立指標である。説明変数は、子ども時代の不利(15歳時の貧困、いじめ、不登校、被虐待経験等)と現在の不利(現在の貧困、非正規雇用、病気がち等)である。媒介変数は、互酬性規範、公的サポートへのスティグマ、私的ネットワークの低階層性(頼りたい人に対する階層帰属意識)である。分析手法として、構造方程式モデリングを用いる。

3 結果

分析の結果、媒介変数のうち「私的ネットワークの低階層性」がもっとも不利と孤立の関連を媒介していることがわかった。具体的には、「子ども期に貧困や不登校などを経験した人が低学歴となり、貧困や病気がちになった結果、頼りたい人もまた低階層として認識され、孤立する傾向が高まる」ことが明らかになった。

4 結論

以上から、過去から現在にかけて様々な不利を抱える人びとは、周囲の人びともまた低階層であること(あるいは、低階層だろうというイメージ)によって、問題が生じた時に人に頼ることができない可能性が示された。そこには、周囲の人に「頼りたくても頼れない」という心情があると考えられる。本報告は、準拠集団内の階層的類似性、およびそれをもたらす子ども期からの不利な経験の積み重ねが、「誰にも頼れない」状況を導くことを示唆している。

文献

- Harknett, K. S. & C. S. Hartnett, 2011, "Who Lacks Support and Why? An Examination of Mothers' Personal Safety Nets," *Journal of Marriage and Family*, 73(4): 861-75.
- Slade, P., C. O'Neill, A. J. Simpson & H. Lashen, 2007, The Relationship Between Perceived Stigma, Disclosure Patterns, Support and Distress in New Attendees at an Infertility Clinic, *Human Reproduction*, 22(8): 2309-17.
- Letkia N., I. Mierin, 2015, Getting Support in Polarized Societies, *Social Science Research*, 49, 217-33.